

麦類の越冬後の管理について

新潟農業普及指導センター

1 生育状況

- 越冬前の生育は、11月の気温が平年に比べ高く推移したため、平年並～やや良であった。
- 今年の最深積雪は新津40cm、新潟13cm（いずれも2月17日）で、昨年ほどの長期積雪期間は見られなかったが、積雪日数は50日で前年並であった。

表1 越冬前（令和3年12月25日時点）の生育状況

	調査地点	播種日(月/日)	播種様式	草丈(cm)	茎数(本/m ²)	葉数(L)	葉色(SPAD値)
大麦	北区	10/25(+13)	全面全層散播	14(131%)	456(77%)	5.9(+2.0)	39.4(+4.6)
	秋葉区	10/4(-5)	ドリル播	37(183%)	1009(138%)	8.3(+2.5)	38.7(-1.0)
小麦	北区	10/12(+6)	ドリル播	16(81%)	600(79%)	7.2(+0.3)	38.3(+0.2)
	秋葉区	10/4(-7)	ドリル播	26(127%)	865(93%)	7.4(+1.3)	38.9(-4.1)

注 大麦品種は「はねうまもち」、小麦品種は「ゆきちから」。

()内は平年比・差、秋葉区の小麦は前年比、差

2 排水対策

- 湿害が生じると追肥しても生育は回復しにくくなるので、必ず排水溝及び明渠の点検・補修を行い、融雪水や降雨時の地表水が速やかに排水されるようにする。

3 越冬後追肥

- 消雪後の追肥は穂数の増加に効果が大きい。1回目追肥は遅れずに確実に施用する。施用時期のめやすは3月上中旬、施用量は窒素で3kg/10a程度とする。
- 茎立期追肥は3月中下旬に窒素で2kg/10a程度とする。葉色が濃い（SPAD値42以上）場合、過剰に追肥すると白色未熟粒の発生が多くなるので、1～1.5kg/10aに減肥する。

表2 越冬後追肥のめやす（大麦・小麦）

区分	施用時期のめやす	施用効果	標準窒素施用量
(1回目) 越冬直後追肥	3月上中旬 → 平均気温が4～5℃以上で追肥効果が現れる。	・越冬による麦体の消耗の回復 ・穂数の増加	<u>3 kg/10 a</u> 加里も同量程度施用する。
(2回目) 茎立期追肥	3月中下旬 → 全体の5割程度の茎が立ち始めた時期（節稈長が2cm程度）	・穂数の増加	<u>2 kg/10 a</u> 葉色が濃い場合は施用量を減らす。

注 上記の後、大麦は止葉抽出期（4月中旬）、小麦は止葉抽出期（4月中旬）と穂揃期（5月上旬）に追肥が必要。次回技術情報で詳しくお知らせします。

4 除草

- 3月の気温は平年並または高い確率とも40%と予報され、ほ場により雑草の生育が旺盛となることが懸念される。特にスズメノカタビラやスズメノテッポウ等のイネ科雑草は「麦角病」の伝染源となるので、発生が多いほ場では、イネ科雑草に有効な除草剤を散布する。